

喜び合つて、舞鶴にて別れを惜しみつつ、それぞれ郷里へと戻つた。亡き戦友のご冥福をお祈りします。

抑留三年ナホトカで返される

岩手県 菅原 義三

昭和二十年の十一月の十日前後だったと思います
が、牡丹江より二段の貨車に乗せられました。そのころは、もう日本人は牡丹江、ウラジオストック、東京へ帰すんだという話でいっぱいでした。ソ連の兵隊も全部日本人は牡丹江、ウラジオストック、東京へ帰すと、こういうふうに言っておったわけです。私たちはもちろんいい方へとりますから、そのことを全面的に信じて貨車に乗りました。貨車には大きなストーブが一個あったわけです。ウラジオストックまで二日か三日しかからない、そんな距離でございます。どうしてこのようなストーブがあったのかと、そのとき気がつかなかったわけです。今にして思えばあのス

トーブはシベリアへ行くための暖房のストーブだったわけでございます。

やがて汽車に乗りまして、牡丹江からウラジオストックへ行くには東へ東へと汽車が進むわけです。なるほど二日ぐらいは東へ進みました。三日ごろから進行方向の右手からおてんとさんが上つてきました。これはおかしい、方向が違う。どうもおかしい、怪しいなあと思つておったんですが、いやまだまだ広しい、汽車も蛇行する關係上、そういうこともあるだろうと、そういうことだったわけですが、四日、五日たつても進行方向の右手よりお日さまが上るわけです。北の方に走っているわけです。いやハバロフスクに着いたらそれから引き返すんだというようなことでおったわけなんです、ハバロフスクと思われる大きな町を過ぎますと、今度は汽車は西へ西へと向かつて行くわけです。お日さまが進行方向に沈むということで、完全に汽車は西へ西へと向かつておるわけです。もうそのころは、半分ぐらいあきらめの心境で、いやこれはだめだと、我々は捕虜としてシベリアへ行つて働かされる

んだというようなことでおったわけです。毎日毎日雪の太平原のシラカバ林をぬうように汽車は西へ西へと走りました。

やがて、バイカル湖らしい湖に差しかったわけです。右手の方に大きな湖が見えてまいりました。一部の人は、いやあそれは日本海だぞというような話もありました。こちで出て、とうとう港に出たと、そういうような喜びを上げたわけですが、ちょうどバイカル湖に近いところの駅に停車したわけです。それならば、塩からいか、甘いか見てこいということで、二、三人の者が降りて水をなめたわけですが、塩からくもない、真水でした。やっぱりバイカル湖だ、もう我々日本に帰ることは断念しなければならぬというようなことで、ほとんどの人があきらめておりました。やがて、汽車がまた西の方に進みまして、それから一週間ぐらい走ったでしょうか、タイセツトという町に着いたわけですから、支線に乗りかえまして、何キロか走ったところで下車ということでした。もうその辺は雪がいっぱい積もっておりますし、寒さも相当な寒さでございます。

ました。今考えますと、十二月の十日前後だったと思います。牡丹江から汽車に乗りまして、それから約一か月ほど貨車に揺られながら、少ない食糧と寒さによって、目的地といえますか、収容所に着いたときにはもうみなヘトヘトで疲れ果てておったわけです。

その収容所は満州から持ってきたテントの幕舎でございました。私たちが入ったときには前に入った人たちが何中隊かおりました、私たちは四番目ぐらいに入ったと思います。一列車千人の梯団ですから、四人ぐらいが収容される大きな収容所が、鉄条網を張りめぐらして、四隅にはソ連の監視兵が立っております。中にはストープが二つほどありまして、火をたいておったんですが、何しろテントですので、零下三十度、三十五度、四十度の寒さには身も心も凍るような寒さだったわけです。その中で私たちはまず着る物を全部着る。あるものは靴下でも外套でもシャツでも何でもかんでも、持っているものは全部着て、そして毛布をおぼって寝たわけですが、とても寒くて尋常に寝れる

ようなものではございませんでした。でも何とかかんとかそういうようなところで生活をしたわけです。

最初は私たちがたくまき取りの作業でございました。隊を組んで山に行きまして、山で腐っておる、枯れておるたきぎを探してくるわけでございますが、雪をかき分けてその中から探すという苦勞は大変なものでございました。でもどうにかこうにか一本なり二本なりずつ持つて隊に帰って、それを燃やしたわけですが、半分まで腐っておる、雪の中にあるまきですので、一向に燃えない。もう不寝番も一生懸命にたくわけですが、なかなかよく燃えない。寒さは寒いというようなことで、私たちは生活をしてきたわけでございます。もちろん電気もありません。シラカバの皮をとつてきて、あれを燃やすわけです。シラカバの皮には油分がありまして、それを燃やすと真つ黒いすすを出すわけですが、相当燃えるわけです。で、それらを燃やして夜の生活をいたしました。

何しろ十二月ともなりますと、太陽が九時ごろ出て、そしてもう三時ごろには沈んでしまふ。ですから、作

業が八時半ということになれば暗いうちに起こされて、暗いうちに食事をしなければならぬ。また帰つてからも三時ごろもう暗くなつてしまふから、暗いところで食事の分配というようなことで、ろうそくもない、電気もない、シラカバの皮を燃やしてすすで真つ黒になりながら、食事の分配をし食べたというような、非常につらい生活をしてまいりました。

また、朝夕点呼があるわけですが、朝七時ごろ点呼、整列をいたしましたも、まだ真つ暗なわけです。そういった中で整列をして点呼を受けるわけですが、なぜかソ連の兵隊は私たちを五列ずつに並ばせるわけです。五、十、十五、二十と数えていくためだと言われておりますが、我々は四列縦隊で四列になつて並ぶわけですか、どうして四列に並ばせないかといろいろ聞いたわけなんです、結局点呼をとる人たちは五、十、十五、二十と足していかなければ勘定ができないんだというようなことだったわけです。そういうようなことであの零下三十度ぐらいの寒空に一時間も点呼をして、本当に身も心も凍つてしまつて、それから幕舎に

帰って寝る、あるいは食事をするというような大変な生活だったわけでございます。

そんな生活を一冬過ごしますと、大抵の人はもう体がもたなくなつてきます。私もそのために栄養失調になりまして、それから栄養失調の収容所に移されるわけです。栄養失調の収容所は労働は軽労働です。舎内の清掃、あるいは環境の整備といったような軽労働、決して外の作業には出さないわけです。そして、食事量も割と質のよいものを食べさせるわけです。量はありませんが、栄養のありそうなものを食べさせてくれたわけです。その栄養失調の収容所に六か月ほどおりました。労働しないものですから、六か月もたちますと、もとのように太ってくるわけです。そうすると、検査がありまして、検査に合格するとまた作業大隊に送られる。大抵六か月もたてばもとのような体になりますので、作業大隊に送られます。あと特別の病気のある方はまたそこに残る、あるいはその病気を治すためにまた別の病院に行くというふうなことになりますが、大抵はもとの作業大隊に行つて作業をするということ

になります。

私の場合はその次の作業は伐採作業でした。これは鉄道を通すための用地を伐採し、土盛り、あるいは土削りをして鉄道を引いていくわけです。この伐採作業からノルマがつきます。ノルマを達成しなければ食糧が減らされる、あるいは時間外にもノルマを達成するまで働かされるというような作業でございます。伐採をした木は大体一メートルぐらゐに束ねまして、それを二メートルの幅、高さが一・五メートルぐらゐな高さに積むわけです。そして、それを何立米と計算をして、ノルマが何立米と、こういうことになるわけです。ところが、それを十人ぐらゐの分隊で全部で何立米と、ちよつと何立米だか忘れましたが、二立米にしても十人であれば二十立米になるわけです。それを二人で鋸を持つてやるわけです。で、十人であれば鋸が五丁なければならぬんですが、三丁か四丁しか来ないというところで、交代に作業をするわけです。ところが、鋸も切れる鋸と切れない鋸があるわけです。自分たちが研ぐわけではございませんから、切れない鋸に当たる

とそれは惨めなものでした。いくら汗水流しても絶対ノルマが達成しない。そのかわり切れる鋸の場合であればノルマが達成することができるといふようなことで作業をしましたが、少ない食糧です。粉が二百グラムでしたか、それからパンが三百グラムというような形の中の食糧で作業をする、しかも寒いところで作業をするといふようなことで、どうしても能率が上がらないわけです。で、結局はごまかすことを覚えてまして、ソ連の検査に来る軍人さんを何とかごまかしてノルマを達成するといふようなことを覚えてまして、随分ごまかしたこともありまして。どうしても団体ですから、そうして条件のよい木の場合であればいいですが、条件の悪い木、あるいは条件の悪い鋸といふようなものがありまして、どうしてもノルマが達成しないといふような場合には、ごまかしてノルマを達成したように見せて、そして宿舎に帰る。そうでもしなければ、私たちはほとんどが栄養失調、あるいはそれ以下になつてしまつて全部が倒れるといふようなこともあるわけですから、ごまかして生きるといふようなことを覚えて

て作業をしてきたこともありまして。

春、夏は木の実、アカザ、それから食べられる木の実は何でも食べました。そして秋はキノコがたくさん出ておりまして、いろんなキノコをとつて、飯盒にいっぱい詰めて、そして煮て食べたといふこともありました。今にして思えば、よく毒キノコがなかったなあ、シベリアに毒キノコはないのかと思うほど手当たり次第キノコをとつて食べたわけですが、おなかもこわさずに今日までやってきたわけでございます。

そして、伐採が終わりまして、今度は土を平らにする作業です。向こうでは、一輪車もあつたわけですが、木の車あるいは鉄の車といふような一輪車、多分ターチカと言つたような記憶があるんですが、それでもつて土を高いところは削り、低いところに埋めるといふような作業をしたわけでございます。やはりこれもノルマが一立米といふふうになつて決められてまして、最初は一立米といふことで、これは割と簡単にやつたわけですが、もちろん、条件のよいところ悪いところがありまして、条件のよいところは作業が割と簡単にできるわ

けです。ところが、ソ連という国はどうしたものか、一日一立米が簡単にできると、次の日は一・二立米、そしてその次の日は一・五立米というふうにノルマが追加されてくるわけです。ですから、一立米のノルマに対し、一・二立米やると大したいい労働者、ハラシヨールポーターだというようなことで、食糧も増量されるわけですが、ただそれだけならいいんですが、一・二立米ができますと、今度は一・五立米というふうにノルマが追加されるわけです。だんだん後になってわかったわけですが、ソ連の労働者はあまり働かない。つまりノルマぎりぎりの線で作業をやめるわけです。ノルマが完全に達成されますと、次の日にはノルマが追加されますから。それを覚えているソ連の労働者はノルマ以上働かない。いつもノルマを達成しないでぎりぎりの線で働くというようなことが後からわかったわけです。ですから、私たちも生きて帰るためにはやはりお互い体を気をつけなければなあ、健康に気をつけなければ、そのためにはあまり無理して働かないで、とにかく働かないで生きて日本へ帰ろうと、こういう

ようなことで過ごしたというふうなこともあったわけでございます。

そのような働きをして土盛りが終わりますと、今度は鉄道を敷く。鉄道を敷く前に谷とかそういうところにはコンクリをしてその橋をつくるというふうな作業もありました。お互いに体をいたわりながら、けがをしないように作業を注意深くして、叱られてもいいからとにかく生きて帰ろうというふうなことで、協力して作業をしたというふうなことも記憶にあります。

二年ぐらいしますと思想教育といいますが、ソ連の共産主義の勉強がソ連の指導者によつてされるようになりました。新聞も日本新聞というふうなものが出まして、共産主義は大変いいものだといようなことが新聞に出て、またそのようなパンフレットを回しながら勉強をいたしたわけです。私たちはそうしなければ日本へ帰れないんだぞ、これを勉強しなければ日本へ帰れないんだと、こういうふうなことで、勉強せいというふうなことだったわけです。また、実際本も何もありませんから、そういうような活字に飢えておったも

のですから、自然とそれを見るようになったわけです。そして、労働者こそ一番偉いんだというようなことをだんだん教わってくるわけです。しかしながら、なかなかソ連のことを心のしんから勉強したといいますが、一部あるかもしれませんが、大抵の人はまず勉強したふりをおこうじゃないか、そうでなければ日本へ帰さないんだから、まあ勉強したつもりにしようというようなことがあったわけでございます。

そうこうしておるうちに、日本に帰すと、どこその収容所から何人日本にたつたというような話がぼつぼつ出てきました。二十二年の春ごろからそういう話が出て、ソ連の軍人も日本人はもうスコラ・ダモイだ、もう日本へ帰すからお前さんたちももう少し働け、もうすぐ帰すんだからというようなことがあったわけでございます。

二十三年でしたか、私たちの収容所にも帰るような機運が見えまして、ある朝点呼に並びましたところが、これから日本へ帰る者の氏名を今から呼ぶから、その者はこつちの別の方に並ぶように言われまして、その

中に私も入りました。よし、これで日本に帰れるということになって大変喜んだわけですが、残った方の中に赤旗といいますが、共産主義といいますが、そういったものの指導者がおりまして、やあ菅原、お前も内地へ帰るようになったんだが、もう少し残ってソ連の共産主義というのを勉強していかないと、三か月勉強したらすぐ帰すから、ひとつ勉強していけということを言われました。しかし、一たん日本へ帰すと、日本へ帰れる名前を言われまして、帰れる組に入つたわけです。もう矢も盾もたまらないとはこのことでしょう、日本へ帰ることだけがもうそのとき頭にあつたわけです。もうどんな誘いも聞かなかつたでしょう。日本へ帰るということで帰る支度を始めたわけです。このことが後でまた大変なことにつながつてくるんですが、そのときはそのときで帰りたい一心で帰り支度をしました。

やがて、汽車に乗りまして、そして帰る方向に汽車が進むわけでございますが、途中タイセツトからナホトカの港に着くまでにはイルクーツク、チタ、ハバロ

フスクという大きな町があるわけです。そういう町に入りますと、汽車も半日か一日ぐらいたまります。そうすると、そういう大きな町にはアクチーブといいますが、そういう方たちがおりまして、我々の帰る汽車に五、六人來まして、そしてあんたたちは日本へ帰ったならば必ず今の政府を打倒して、そして新しい労働者の階級の世の中をつくるんだと、そのようにこれから行って頑張ってもらいたいというようなことを言われるわけです。私たちは何そんなことを、帰ったならばもう昔のようにやるんだ、半ばそういう気持ちでそういうアジる人たちの話をうわの空で聞いておったわけです。ハバロフスクにはそういった教育をする一つの学校があると聞いておりましたので、ハバロフスクの場合は最も激しくそういうふうなことを聞かされました。私たちは聞かされても内地へ帰るんだからもういいじゃないか、適当にしなさいよというぐらいでナホトカに來たわけです。

ナホトカに着きましてナホトカの駅から、夏という大きな海が見えました。そして、その岸壁には大き

な日本の船が着いておりまして、ナホトカには第一分所、第二分所、第三分所とあったように記憶しますが、第一分所に入って検査をし、第二分所を通過して第三分所で最後の仕上げをして乗船と、こういうことになるわけです。ちょうど第三分所から乗船する人たちが隊を組んで行くのが見えまして、ああ、あの船に乗って帰るんだぞと、もうみんな先に乗っているから我々もすぐ乗れるんだという帰国の希望を大きくふくらませて、その収容所に向かったわけです。

ところが、私たちの入るところは先に降りた人たちとは別な収容所に入りました。何だおかしいな。その収容所はあまり立派な収容所ではなかったわけです。その中に入れられたわけです。おかしいな、どうしてこんなところに入ったのかな、いや、いっぱいだからまずここに入って、それからだんだんに向こうの方に移っていくんだらうということも言われておったわけです。ところが、最後尾にきた人たちは、いや、ここに入ったのはまた戻って作業大隊に行くそうぞという話を聞いてきたと、こういうわけなんです。そんな

ばかなことがあるものか、もう船も来ているし我々もすぐ乗れるんだということで、その人は長い旅に疲れたから休めということで、何もしないで環境の整備をしてそして休んでおりました。夕飯も食べさせてもらって、さて一服ということになったところが、その中にやはりナホトカのいろいろ世話をしている人たちが五、六人入ってきたわけです。そうして、長い間シベリアで働いてご苦労であつたと。長い旅を疲れたでしよう、そこまではよかつたんですが、あななたちはずっとこのシベリアの列車で来る途中に大きな町を通ってきたわけだが、あななたちの行動をつぶさに観察してきましたが、残念ながらまだまだ共産主義の勉強が足りない。こういうことで日本に帰しては我々の共産主義を日本の国に持つていくことができない。あななたちのような共産主義に徹底しない方たちは帰すわけにはいかない。あしたまた貨車に乗って奥地に行つてもう少し働いてもらいたい、こういうことを言われたわけです。

今まで三年間も働いて、そうしてようやくここにこま

できて、海の見えるところ、そして日本の船があるところまできて、それを見ながらそしてまたそれに乗る人たちを見ながら、またもとへ戻つてあのようなつらい労働をしなければならぬかと思つたときには、もうだれも何とも言う人はありませんでした。恐らく、みんなの思いも私の思いと同じだったでしょう。だれかが大きな、ああ、というため息をついた以外にはもうだれも何も言わない。そこそこに毛布をかぶつてみな寝てしまいました。私も毛布をかぶつたわけですが、日本へ帰つたならば懐かしい故郷もあるだろう、父も母も兄も弟も元気でいるだろう、そういうことが次から次と頭に浮かんでどうしても眠れなかつたわけです。そうして、翌日にはまたナホトカの駅に行きまして、貨車に乗つて奥地の方に向かいました。そのときは奥地の奥地までは行きませんが、興凱湖の見えるところの草原に行きまして草刈り作業ということだったわけですが、とにかくそれからは、いやどうしてもこれは共産主義を勉強して赤旗の歌、それからインターナショナルの歌、そういうものを歌わなければだめ

だと、何でも共産主義はいいということにならなければだめだということで、それからは毎日勉強してそして赤旗も歌ったわけです。

その前にどうして我々の梯団がナホトカに着くまでに民主主義の勉強、共産主義の勉強ができない梯団なのかということナホトカに問い合わせたところが、だれとだれが乗っているはずだ。この人たちがリーダーとなって駅途中途中において共産主義を勉強しているはずだということが連絡あったらしいです。その中の一人が私だったわけです。つまりタイセットで後三か月勉強したならば帰すということを振り切って帰ってきたわけです。ああ、あのとき三か月勉強せよと言われていたが、このことだったのかなあと私はつくづく思いました。それは後の祭りですが、そこで草刈り作業をやったわけです。それからというものもう毎日赤旗の歌、インターナショナルの歌、あるいは労働者の歌というものを全部歌って歩いたわけです。そうして、何でもかんでも共産主義万歳などということやってきました。そこで三か月草刈りの作業

をいたしました、草刈りのほかにもコルホーズに行つて芋掘りとかあるいはニンジン掘りとかいう作業をしました。主として草刈り作業をして、そのときの草刈りの目標が三千トンだったと思うんですが、その目標達成に向かって頑張つて、そして何とかなんとか目標を達成して帰りました。

六月ごろに草刈り作業に行きまして、六、七、八と作業をし、九月の初めに今度はまた帰すということで貨車に乗りまして、今度こそナホトカに着いたわけです。もうそれからというものナホトカでは何でもかんでも先に言つたみたいに共産主義万歳などということ、行進するときには一生懸命赤旗の歌を歌つて向こうの人たちのご機嫌をとりながらやってきました。おかげで第一分所にはいれまして、そこでいろいろ注意を受けまして、いろいろの検査、被服の検査というものもありました。そして怪しいものを持っているものはまたもとに戻されるということで、紙類、書いたもの、あるいは写真その他日本新聞等々の種類は全部没収されました、第二分所に回されました。第二分所

でも検査をしてよしということで、次、第三分所へ入って最後の分所です。ここでもすっかり視力検査からいろいろな検査をして船の来るのを待ちました。

やがて、私たちの乗った船は信濃丸でございましたが、信濃丸がきまして船に乗ったわけです。船に乗るときには一人一人名前を呼ばれて、そして船に上った記憶があります。その船に乗るまでもし何かがあった人はまた帰されるんだということだったわけです。船に乗ればもう大丈夫だということで、ビクビクして船に乗るのを待ったわけです。名前を呼ばれて、タラップを駆け上るときにはもう一目散という形で駆け上りました。そして船に入り、船に入ってもまだ港から出ないうちは安心できません。船に入って横になりました。そこには日本人の船員がおりましたし、また警備兵もおりまして、やれやれようやくと日本へ帰れるかということになったわけです。船は静かに港を離れて日本に向かって走ったわけです。

最後に、あの船が三日か四日ぐらいで舞鶴に着いたわけですが、あの舞鶴で日本の島を見たとき、きれい

な色、鮮やかな緑の松を見たときには、ああ、これで本当に日本に帰ったんだと、もう涙が出てしようがありませんでした。今まで本当につらい思いをして、この日のくるのを何度待ちわびたことか、そう思ったときに、そして目にも鮮やかな緑の松と島々のあのきれいな日本の国を見たときには、本当に涙が出て、よしこれで帰ったんだと、これで本当に帰ることができたんだという考えにひたったことを覚えております。

餓鬼牢獄

岐阜県 服部 酒造雄

最初の収容所へ足を踏み入れたのは、二十年十月も末のことであった。シベリア第二鉄道建設（バム鉄道）基地タイセツトから分かれ、五十八キロメートルの地点の第八ラゲル。捕虜五百人が、食うや食わず、長旅の果て、疲れ切った姿での入ソだった。二重に張りめぐらされた鉄条網、広い敷地の四隅に高い望楼が立